

## 「恐れることはない」 ヨハネによる福音書 6:16-21

先週私たちは、ヨハネによる福音書 6 章 1 節以下の記事を通して、イエスさまが 5 つのパンと 2 匹の魚で、5 千にも群衆を満腹させたことを学びました。弟子たちが、こんなに大勢の群衆に食べ物を与えることなど、とても無理だ、何もできないと、言い張る中で、イエスさまは子供の持っていたわずかの、パンと魚を手に取り、感謝の祈りを捧げて、みんなに分け与えられたのです。するとそこに居たみんながそれを受け取って、身も心も満たされたのです。

私たちは、そのことを通して、自分の持っているどんな小さなものでも、それを感謝して主にゆだね、みんなに分け与えられるときに、それが思いもよらない大きな力になることを学びました。私たちの主は、私たちの小さな力、小さな献げものをも、喜んで受け、それを大きな力に変えてくださるのです。

さて、今日の箇所はその 5 千人パンの奇跡に続いて起こった出来事です。

6 章 14 節を見ると、人々はイエスさまのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来られた預言者である」と言い、イエスを「王にするために連れて行こうとした」と記されています。人々の熱狂ぶりが目に見えるようです。彼らはイエスさまがなさった「しるし」の深い意味を知ろうとせず、いつでもパンが食べられるように、イエスさまを担ぎ出して自分たちの「王」にしようとしたのです。

目先の利益や、感情的な興奮で自分たちの指導者を選ぶということは、大変危険なことです。世の中が不況になり、失業者が増えたり、食料が不足したりして社会的な不安が広がると、人々は目先の困難を打開するために、強力な力をもった指導者を求めるものです。1930 年頃、ドイツにおいてヒットラーが台頭したときがまさにそうでした。失業者が増え、人々の中に不安と深い闇が広がった時、人々はよく考えずに、強い指導力を求め、あのヒットラーの独善的な強さに魅了され、彼をドイツの総裁に選んだのです。あの熱狂的な熱弁に、多くの人々が冷静な判断力を失い、愛や真実よりも、力と富によってドイツ民族の誇りを誇示し、ユダヤ人や障がい者、社会的に弱い人々を抹殺して、世界をも支配しようとする間違った道を歩むようになったのです。これは、ドイツだけのことではなく、日本もそうであったわけですが、ドイツでは敗戦後、その過ちを認め、新しく生まれ変わったわけですが、日本はそうではなく、依然として、経済的にも軍事的にも強い国づくりを目指し、強い指導者を求めてきました。

イエスさまは、人々が自分を「王」に祭り上げ、自分たちの指導者に仕立てようとしていることを知った時、それを振り切るようにして、「ひとりでまた山に退かれた」(15)

のです。これは、人々の期待に対するはっきりとした拒否であり、人々の熱狂的な思いを冷ますための避難の意味もあったと思います。またマタイやマルコ福音書によると、「イエスは祈るためにひとり山に行かれた」とあります。イエスさまは、父なる神さまとの祈りの対話の中で、深くご自身の歩むべき道を確認されたものと思われます。

イエスさまは、群衆を愛し、「飼う者のいない羊のよう」だと云って深く憐れみ、パンの分け与えられたのですが、それは単に彼らの肉体的な欲求を満たすためだけではなかったのです。「人は、パンのみによって生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」(マタイ 4:4)と言われたように、すべての人が神からの命のパンにあずかり、永遠の命を受けることを願われたのです。パンの奇跡は、そのことの「しるし」であったのです。

人は、とかく周囲の人々からもてはやされたり期待されたりすると、その気になって、有頂天になったり、ほんとうの自分を見失い、不遜になったり、傲慢になったりしがちなものです。そういう誘惑があります。しかし、イエスさまは、どこまでも謙虚に「神の子」としてのご自分の立場をわきまえられ、人々に仕える使命を貫かれたのです。それは「王」になって、権力を振るい、仕えられる立場を否定して、あくまでも「僕」として、人々に仕える生き方でした。

さて、今日の箇所は、イエスさまが、そのように人々を避けて、山に退いておられる間の出来事です。弟子たちは、イエスさまが居なくなったので、自分たちだけで湖畔に下りて舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに向かったのです。そこでイエスさまと落ち合う約束になっていたのかも知れません。

すでに暗くなり、強い風が吹いて、湖が荒れ始めたと言います。私も行ったことがありますが、ガリラヤ湖は周囲を山に囲まれたすり鉢状の湖です。そのため、夜になると、熱せられた湖面の空気が上昇して希薄になったところに、山から冷たい空気が風となって吹き降ろしてくる関係で、急に波立って荒れることが多いようです。

この記事は、マタイやマルコ福音書にも同じように記されていますが、マタイやマルコの記事によると、弟子たちは「逆風にこぎ悩んでいた」と記されています。彼らの多くはこの湖の漁師でした。その彼らにとってもこぎ悩むようなことがあるのです。どんな専門家にも、人間の力には限界というものがあります。どんなに慣れている仕事でも、行き詰ることがあるのです。漕ぎ出してから「25 ないし 30 スタディオン」と言いますから 5 キロから 6 キロ位の地点に達したころです。湖の真ん中ぐらいでしょいうか、マタイやマルコでは「夜明け近く」となっています。一晩掛かってそれくらいしか進んでいないのですから、よほど、波風に翻弄されて難儀したようです。

そこにイエスさまが湖の上を歩いて舟に近づいて来られたのです。それを見て弟子

たちは「恐れた」とあります。マタイやマルコ福音書によると、弟子たちは「幽霊だと思い、大声で叫んだ」と記されています。

真っ暗な荒れ狂う湖の上を歩いて近づいてくる人影をみたら、だれでも驚くに違いありません。イエスさまは、そういう怯える弟子たちに声をかけたのです。「わたした。恐れることはない」(20 節)と。この言葉に彼らはどんなにホッとしたことでしょう。幽霊ではなかったという安心以上に、イエスさまだ！という喜びです。

マタイ福音書によると、ペトロは感激のあまり「主よ、あなたでしたか」と叫び、「わたしを招いて、水の上を歩いてそちらに行かせてください」と頼み、「来なさい」とのイエスさまの招きに応えて、舟から降りて、水の上を歩いてイエスさまの方へ進んだと記されています。もっともペトロはその途中、強い風に怖くなり、沈みかけて、イエスさまに助けられ、「なぜ疑ったのか」とお叱りを受けたと記されています。ヨハネ福音書には、このペトロのエピソードは記されていませんが、弟子たちにとって、それほど、この嵐の湖でイエスさまに出会えたことが、大きな喜びであったということです。彼らは、どれほどホッとし、安心してイエスさまを舟の中にお迎えしようとしたことでしょう。

21 節をみると、「弟子たちがイエスさまを舟に迎え入れようとする、間もなく舟は目指す土地に着いた」と記されています。マタイやマルコ福音書によると「イエスが舟に乗り込まれると風は静まった」となっています。ヨハネ福音書では、「風は静まった」とは記されていないのです。ヨハネ福音書の記者は、おそらく、外で荒れ狂う風や波よりも、弟子たちの心の中の嵐を問題としたためではないか、と思います。湖の外の風は、依然として吹きまくり、波は荒れ狂っていたかもしれない。しかし、弟子たちの心の中の嵐は、主イエスと出会い、主イエスを舟に迎え入れることによって、喜びに満たされ、難なくすぐに、目的地に着くことが出来た、ということであったと思います。

この出来事は、この世における教会の姿を象徴していると言われます。教会はいつの時代も、嵐のような風や波に行く手を阻まれ、なかなか前に進めないことがあります。世にある教会は、常に時代の波や逆風にさいなまれ、時には戦争や迫害に遭い、殉教者を出すこともありました。

だいたい前になりますが、O.ブルーダーという人の「嵐の中の教会」という本を読んだことがあります。ヒットラー政権下のリンデンコップという田舎の小さな教会が、まるで嵐の中の小舟のように激しく揺さぶられる中で、数名の教会員が新任のグルント牧師共に、ナチズムに抵抗してイエスを主と告白する信仰を貫き、教会を守っていくという実話に基づいた話です。最後にグルント牧師は、ヒットラーへの忠誠を誓うことを拒否したかどで捕えられていくのですが、教会の役員であり木こりを生業として

いる著者は、次のような言葉で本書を結んでいるのです。

「わたしたちはこれからどうなってゆくか、それは分かりません。国家の力は実に強大に見えます。一方、教会はいかにも小さくてまずしく、ますます貧しくなってゆくようです。しかし、私たちは主のみ言葉を聞いたのです。…わたしたちはそれを決して忘れることはできません。…わたしたちは牧師の投獄が転じて教会の祝福になるように、牧師のために祈ります。また牧師夫人が今の境遇に耐えていけるように、祈ります。さらにわたしたちは自分たちのために祈ります。「主よ、信じます。不信仰な私たちをお助けください」と。そこには、「主は近い」という信仰と、無牧の教会をみんなで必死に守りぬき、「主の教会」を立てて行こうという固い決意とがみなぎっています。

時代の闇は深く、波風は一向に静まることがなく、時にはどうしていいのか途方に暮れてしまうことがあるかもしれません。けれどもイエスさまは、どんなときにも、私たちを見放すことも見捨てることもないのです。嵐の中にある私たちに近づいて来られ、声をかけてくださるのです。「わたしだ、恐れるな」と。

こども讃美歌の中に、「かなしいことがあっても」というのがあります。

「悲しいことがあっても/ 泣きたいときにも/ いつもいつも君のこと/ 守ってくれるだろう/ イエスさまが来て/ イエスさまが来て/ イエスさまが来て 守ってくれるだろう」という歌です。

暗闇の中で嵐に見舞われ、不安と寂しさの中で、泣きたいような気持ちになっていた弟子たちのもとにイエスさまが近づいてきて声をかけてくれた。その時の弟子たちの気持ちは、このような思いではなかったかと思えます。

教会はいつの時代も、この世の激しい波風を受けて、揺さぶられています。闇の夜にあって、みんなで一生懸命に舟を漕いでも、なかなか向こう岸にたどり着けないそのようなもどかしさ、虚しさのなかで、時には、イエスさまがどこにおられるのか、神さまは私たちをお見捨てになったのかと、ふと思われるようなときもあるかもしれません。まさに今、長引くコロナ禍の中で、みな孤立し自由を奪われ、閉じ籠められたような状態の中で、そのような思いになってしまうこともあるのではないか、と思えます。

しかし、イエスさまは、あの弟子たちをお見捨てにならなかったように、教会をまた私たちをお見捨てになることはありません。激しい波風を越えて、波頭を踏むようにして近づき、「わたしだ。恐れることはない」と声をかけてくださるのです。

「わたしだ、恐れることはない」。主は今もこの嵐の海に漂うような教会に歩み寄り声をかけてくださるのです。主イエスを迎え入れ、主の導きに従って、共に神の国を受け継ぐものでありたいと願います。

アーメン